

甘くて苦い

木 谷 実

奨励者紹介〔きたに・みのる〕

日本キリスト教団京都丸太町教会伝道師

わたしはまた、もう一人の力強い天使が、雲を身にまとい、天から降って来るのを見た。頭には虹をいただき、顔は太陽のようで、足は火の柱のようであり、手には開いた小さな巻物を持っていた。そして、右足で海を、左足で地を踏まえて、獅子がほえるような大声で叫んだ。天使が叫んだとき、七つの雷がそれぞれの声で語った。七つの雷が語ったとき、わたしは書き留めようとした。すると、天から声があつて、「七つの雷が語ったことは秘めておけ。それを書き留めてはいけない」と言うのが聞こえた。すると、海と地の上に立つのをわたしが見たあの天使が、

右手を天に上げ、

世々限りなく生きておられる方にかけて誓った。

すなわち、天とそこにあるもの、地とそこにあるもの、海とそこにあるものを創造された方にかけてこう誓った。「もはや時がない。第七の天使がラッパを吹くとき、神の秘められた計画が成就する。それは、神が御自分の僕である預言者たちに良い知らせとして告げられたとおりである。」

すると、天から聞こえたあの声が、再びわたしに語りかけて、こう言った。「さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取れ。」そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使はわたしに言った。「受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」わたしは、その小さな巻物を天使の手から受け取って、食べてしまった。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった。すると、わたしにこう語りかける声が聞こえた。「あなたは、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて、再び預言しなければならない。」

(ヨハネの黙示録 10章1—11節)

一物全体

仏教の教えの一つに「一物全体」という言葉があります。一つのものは、全体で調和がとれている。どこかの部分だけが良いのではなく、全体としてバランスが整った状態でできている、という考え方です。これは、お寺の食事や、食べ物について、使われている言葉です。一つの食材を丸ごと食べる。たとえば、大根でしたら大根の本体部分(白い実のついているところ)だけではなく、大根の葉や、皮も余すことなく食べる。お米でしたら、糠の取れていない玄米を食べる。それが一物全体の考え方です。すべてを無駄なく食べること、捨てずに全部食べることが、大切にされています。人間が食べ物を食べる時には、それが動物であろうと、植物であろうと、その「命」をいただいています。何かの命をいただいて、自分の命がある。それに感謝して無駄なく食べましょう、という教えだそうです。それが一物全体なのですが、この考え方は食

育や健康法などにも用いられています。「生命あるものを丸ごと食べるからこそ、体が整う」。食育を提唱した石塚左玄という人の言葉です。この方は食べ物と心のバランスについて論じた人であり、明治時代に活躍した学者なのですが、彼は一物全体の教えについて紹介しています。「ある一定の食品、食事ばかりだけでは、良くない。すべてを無駄なく、バランスよく食べられるように、食材は造られているのだから。このような考えをもって、食育の研究を進めていきました。神の造られたものに無駄はなく、それすべてが素晴らしい。だから、その命を丸ごと食べる」。仏教の考えを採用している人ですので、その考え方には宗教的な部分も垣間見られます。

「食べる」ということは、人間が生きていくうえで不可欠な営みの一つです。私たちは日々、何かを食べて生きています。バランスのとれた食事、とれていない食事もあることでしょう。各家庭の状況によっても変わっていきます。経済的な問題もかかわってきます。どのような状況であったとしても、食べることは不可欠です。これは変わりません。ですが、何をどのように食べるのか。これは時代と共に、また人によって変わってくる問題なのです。

食べる

先ほどお読みいただきました、ヨハネの黙示録の御言葉。ここにも、食べるということが記されていました。食べるのは野菜でも、肉でもありません。食べ物ではなく、巻物です。その巻物は天使により渡されました。ヨハネの前に現れた幻、その天使によって渡されたのです。ヨハネは、その巻物を受け取りなさい、と告げられます。ヨハネが天使に巻物をくれるように求めます。そこで、天使が応えます。「受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い」。

ここで天使は「受け取って、食べてしまえ」と言っております。文語訳聖書では、この部分がこのように書かれています。「食(くら)い尽くせ」。食べてしまいなさい、取って食べなさい、といった表現ではなく、食い尽くせ。より強い表現が使われています。ただ食べるのではなく、受け取ったものをすべて食べ、消化してしまいなさい。そして自分のものとしなさい。そのような意味が込められている表現です。受け取った巻物を食べ尽くした時、それは口には蜜のように甘く、腹には苦いものとなりました。

この巻物を食べて、「口には甘い」という表現。これはエゼキエル書にも書かれている言葉です。そこで預言者が遣わされる時に巻物を食べると、それが蜜のように甘く、私の心の喜びになったと語られています。蜜のように甘い御言葉の力に励まされ、それを伝えることは心の喜びであった、という預言者の心情なのでしょう。しかしながら、その後には遣わされていく預言者たちの状況は、決して蜜のように甘いものではありませんでした。語る言葉が、救いだけだったら甘いのでしょう。ですが、裁きや悔い改めを伝えることは、甘いことばかりではありません。苦々しい表情をもって、言いづらいことも語っていかなければなりません。だからこそ、ヨハネの黙示録で巻物を食べた時、口には甘いものが、腹では苦くなっていったのです。10節後半に、それを食べてしまうと「わたしの腹は苦くなった」とあるとおりです。救いの恵みは「甘い」なのですが、裁きの宣告、悔い改めない民に語ることは「苦い」のです。神様の言葉は楽しみ、喜びです。それは「口には蜜のように甘い」なのですが、裁きの宣言は「腹に苦い」のです。それを伝えられる側、裁きを言い渡される者の腹にとっては苦いもの。そして語る側、神様によって与えられて裁きを伝える側にも、腹には苦い言葉なのです。

預言者の食べた巻物。そして、ヨハネの黙示録でヨハネが食べた巻物。それには神様の言葉、御言葉が記されています。語る者にとっての喜び、または苦いものとなる御言葉です。これは預言者だけに限ったことではありません。私たちが実際に巻物を食べることはないのですが、御言葉を受けて生きています。御言葉を食べる、そのよう表現が適切なのかは分かりません。ですが、御言葉をその中に取り入れさせていただいて、生きる。食べることで近い形で私たちは、その御言葉の一つひとつに養われています。そのような御言葉は、口には甘く、腹には苦いのです。

聖書の中には、さまざまな御言葉が記されています。その一つひとつが、私たちに与えられたものです。好きな聖句もあることでしょう。さまざまな御言葉の中から、支えとなる御言葉が与えられています。支えとまではいかないかもしれませんが、「聖書のこの箇所が好きだな」「こういったところが面白いな」という聖書の言葉もあるかもしれません。そういった意味で、御言葉は甘いものであります。生きる活力や支え、慰め、励みとして、私たちを助けてくれているものです。人間の喜びとして御言葉は与えられているのです。

しかしながら、聖書に書かれている言葉のすべてが、私たちにとって甘いわけではありません。裁きの言葉、人間の罪の告発について書かれている箇所もあります。神様に命じられた戦いによって、町の人々全員をイスラエルの民が殺しました。読んでいて辛くなるような物語も、聖書には記されています。具体的に裁きの言葉でなかったとしても、聖書によって自らの間違いや、考え方が間違っていたのだと示され、気付かされることもあります。自らの行いを諫める御言葉。そのような気付きを御言葉に与えられることもあるのです。喜びや生きる希望を与えてくれるのが、御言葉です。甘く、私たちの心に沁み渡る言葉です。しかしながら、それだけではありません。私たちの腹、深いところに苦く刺さる言葉。心に刺さるような御言葉もあります。私たちにあって甘い言葉も、苦い言葉もあるのです。甘さも、苦さも共に含まれている、甘くて苦いもの。それが神様によって与えられている御言葉です。甘さも苦さもあって、神様は私たちに臨んでくださっているのです。

御言葉を食べる

最初に「一物全体」という仏教の教えをご紹介いたしました。神様の与えてくださる御言葉、それを食べる。どのように食べるのでしょうか。甘いところだけを選んでいただく。苦いところは捨ててしまう。そうではないのです。甘いところも苦いところも、神様が与えてくださっている大事な御言葉です。甘さも、苦さも、御言葉として受け入れる。それは、耳障りのよいことだけではなく、きれいな話だけではなく、人の欲望や汚い部分も聖書は浮彫にしています。「神様に叱られている」そう思うような御言葉もあります。神様は人間に厳しい言葉をもって、その御言葉をお与えになることもあるのです。ですが、それは聞かなくてもよい、避けて通ってもよい御言葉ではありません。そのすべてを食べる。与えられているものを、丸ごといただくことによって整っていく。御言葉をとおして神様によって、整えられていきます。神様が与えてくださっているもの。その甘さと苦さ。すべての御言葉によって、私たち人間は養われていくのです。

そして、そのどちらも、神様の優しさなのです。厳しさ、甘さ。親が子に接するように、神様は私たちを神様の子どもとして、厳しさと甘さをもって、優しく臨んでくださいます。甘さと苦さ。そのどちらも神様が示してくださる、愛にあふれた優しさです。イエスが弟子たちや社会の人々に厳しい言葉を投げかけたように。イエスが愛をもって食事を共にしたように。苦い言葉も、甘い言葉も、苦い思いも甘い思いも含めて、人へ

の優しさを示してくれました。私たちは聖書をとおして、そのようなイエスのことを伝え聞いています。聖書に記されている御言葉によって神様は、養ってくださるのです。甘さと苦さを含めた優しさによって、私たちは養われているのです。与えられたこの生命は、丸ごと食べることによって整えられていきます。甘くて、苦い。どの御言葉も、私たちを生かすものです。そんな神様の優しさをいただきながら、すべての与えられた言葉を糧に歩いてまいりましょう。

2017年6月7日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録